

陳述書

2019年3月22日

佐賀地方裁判所 御中

住所 佐賀市川副町

氏名 塩山 正孝

(1)

私はNHKドラマ「いだてん」の舞台になっている熊本県玉名郡和水町という田舎の町で生まれ育ちました。緑に囲まれたのんびりした自然環境でした。そして今、佐賀市川副町に移り住んでもう30年近くになります。こちらも同様にのんびりした町ですので、私と相性が合うのでしょう。

社会問題への意識をあまり持たずに生きて来た私の目を突然覚ましてくれたのが、東日本大震災と福島第一原発の大事故でした。

2011年3月11日、私と妻は長女の熊本への引越の手伝いに行った帰りの車の中でした。突然下の娘から「今、日本のどこかで大変なことが起きてるよ！」と電話がかかってきました。すぐにラジオのスイッチを入れ、東北地方で大地震が発生して、巨大津波が海岸に打ち寄せて大災害となっていることを知りました。二人とも非常に不安な気持ちで我が家に帰ってきました。

そして、福島第一原発が全電源喪失したと。その後の政府の対応にはイライラと不安を募らせるばかりでした。原子力の専門家たちがテレビに何度も顔を出して「安全だ」と説明をしていましたが、結局メルトダウンという最悪の事態となったわけです。原子炉を冷却しようと、自衛隊ヘリ隊員たちが空中から数トンの水を決死の覚悟で命中させようとしていましたが、これが日本の原子力技術だったのかと国の無力さに全く呆れてしまいました。

全国の皆さんと同様に私も被災地にペットボトル水を送ったり、寄付金を送ったりしました。被害に遭われた方々が家族や友達や家までも流されたり、まさに地獄に突き落とされた状況にある時、この自分も現地に行って少しでも役に立つことをしなくてはと考えていました。そんなある朝、妻が「原発反対の人たちが県の図書館前の公園でテントを張ってるって、新聞に書いてあるよ。読んでみんなね」と教えてくれました。私はその記事を読んだ後、自転車でテントまで飛んで行きました。

その日から自分の国の不条理さを少しずつ知るようになりました。そして、一社会人としてそれまでなんの問題意識も持たずに退職生活に突入したばかりの自分に転機がやってきました。玄海原発を止めるための行動に加わったのです。

(2)

3.11から丸8年が過ぎました。しかし福島原発事故は今もそのまま続いています。今、オリンピックの話題で賑やかですが、この今も“原子力緊急事態宣言発令中”なのです。帰還困難区域の人達は故郷を追われて、今なお帰りたくても戻れない。自主避難した人達はとうとう住宅支援も打ち切られました。さらには離婚に至るケースも数多く聞かれます。原発事故が多くの人々の人生を狂わせてしまいました。お金では取り戻せないのが原発事故です。

私は若い頃、福島に2～3度旅行で行ったことがあります。福島の自然はととても素晴らしいものでした。安達太良山に登ったり、スキーをしたり、夜には宿で友人と美味しい酒を飲んだり、あの緑豊かな山々の美しい姿は今も私の青春の思い出の中に生き生きと残っています。その大自然に放射能が降り注ぎ、山々は人間が犯した罪に無言で泣き叫んでいると思うととても悲しくなります。

玄海原発でもあのような或いはあれ以上の原発事故は絶対に起きないと誰が断言できるでしょうか。国の原子力規制委員会でさえ事故は100%起きないとは言えないと“断言”しているのではないですか。

福島原発事故の時は太平洋側に大半の放射能が風に流されて行ったから、東京など大被害に会わずに済みました。あの時、風向きが反対だったらどうなっていたでしょう。もし、玄海原発で同じような事故が起きたら、九州はもちろん西日本あるいはそれ以上の広範囲に被害が及び、日本が破滅状態となるのではないのでしょうか。

2016年の熊本地震では熊本市内にある妻の実家もかなりの被害を受けました。庭のブロック塀は将棋倒しで倒れ、家の中では台所の床が割れたお茶碗などで足の踏み場もなく、床の間では仏壇が倒れてめちゃめちゃになりました。隣の家の庭では断層が走っていたようで地面が直線状に段違いになっていました。あんな激しい地震が1度ならず2度も発生したら原発も絶対に大丈夫とはいえないでしょう。日本列島のどこで大地震が起きても不思議ではないことがもう一般常識となった現在、玄海原発を直撃する可能性も大いにあります。しかし、玄海原発だけは人の手で止めることができるのです。命にかかわることだから、原発は何として止めなければなりません。

(3)

しかし、私達が原発をもう止めて欲しいと心から願っても、どうしても立ちはだかるものがあります。それは“司法の壁”です。

2015年3月20日、この法廷でMOX燃料使用差止裁判の判決言い渡しを傍聴しました。裁判長が法廷に現れ、「訴えを全部棄却いたします」とさっさと言い渡すや否や、後ろの部屋へ戻って行きました。判決を待っていた私達は「えーっ」と力がなくなりました。

その時私はつくづく思いました。日本は遅れていると。この原発問題では理不尽なことが如何に明白であっても、今の日本では裁判所に棄却されることがほとんどです。いくら裁判に訴えても期待できないというのが正直な気持ちです。3.11福島事故で日本人は何も学ばなかったのでしょうか。安心安全な普通の生活を守るために、あのような危険なものをなくす努力が日本人一人一人に必要なのではないのでしょうか。特に裁判官のみなさんは私達市民の生活を左右する強い決定権をお持ちです。

昨年9月の伊方原発再稼働差止についての広島高裁仮処分異議審決定は「社会通念」という言葉を使って、住民の訴えを退けました。「社会観念」という文言を初めて使って女川原発差止請求を棄却した元裁判官は、「原発事故なんてめったに起こらないだろうと私自身が考えていた。理論上は『世の中の人々がどう考えているか』という点で判断するが、無意識に裁判官個人の考え方が影響する」「裁判官は原発などの政治的問題の場合、よほど世論が明確にならない限り、現状維持を選びやすい」と語っています。(2018年11月22日付毎日新聞) そうなのではないでしょうか。

最近街頭などで反対のチラシを配る時に感じるのは、町行く人たちの反応が以前とは非常に違って来たということです。以前は「原発が止まると電気が止まるから困る」とか「経済に悪影響を与えるから」などの容認の声をちょくちょく耳にしていました。しかし、今そのような声が聞かれなくなりました。「原発はもう要らない」という社会通念にはっきりと変化したといえます。

福島の事故で日本のみならず世界中の多くの人々が何かを学んだと信じています。この日本が安全で安心な国となりますよう、是非、フェアなジャッジメントを期待いたします。